情動伝染及び情動読み取りの感受性と過剰適応の関係

○長屋 佐和子¹・杉浦 いづみ² (非会員)

(1名古屋女子大学・2東海学院大学)

キーワード: 過剰適応, 情動伝染, 情動読み取り

The effects of Over-Adaptation on Emotional Contagion and Emotional Reading

Sawako NAGAYA¹, Izumi SUGIURA²(Nagoya Women's University¹, Tokaigakuin University²)

Key Words: Over-Adaptation, Emotional Contagion, Emotional Reading

序論

個人の心的状態の安定を示す内的適応と、社会的・文化的環境に対する適応を示す外的適応のバランスが崩れた状態のひとつとして過剰適応がある。過剰適応とは、環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも外的な期待や要求に応える努力を行うことと定義され、自己抑制的で他者の期待に沿うような受動的で他者志向的な傾向がみられる。

このような他者志向的な傾向によって、他者の表出する感情や情動に対して敏感になり、より強く読み取ることが考えられる。本研究では、過剰適応と他者の感情表出に対する感受性(情動伝染)、および情動の読み取りとの関係を明らかにすることを目的として調査を行った。

方法

調査対象者 4年制大学の学部学生、男性100名、女性102名の計202名(平均年齢19.95歳、SD=1.75)を対象に質問紙調査を実施した。

調査内容 (1)過剰適応 桑山(2003)による過剰適応尺度(下位尺度:対自,対他)を用い、5件法で回答を求めた。また石津・安保(2008)が作成し、益子(2009)が改訂した過剰適応尺度(下位尺度:自己抑制,よく思われたい欲求,他者配慮,自己不全感)を用い、5件法で回答を求めた。(2)情動伝染 日本語版情動伝染尺度(下位尺度:愛情伝染,怒り伝染,喜び伝染,悲しみ伝染)を用い4件法で回答を求めた。(3)IFEEL Pictures (JIFP)の乳幼児表情写真から6枚の図版(快:図版4・21,不快:図版12・17,ニュートラル:図版9・29)を用い、快不快の程度と覚醒度について5段階で評定を求めた。

結果

過剰適応の性差を検討したところ、過剰適応($t(200)=-3.45, p<.01, t(200)=-2.32, p<.05$)において有意差が認められ、どちらも男性(桑山平均=69.43, 益子平均=72.13)に比べ女性(桑山平均=75.12, 益子平均=76.76)の得点が高かった。

情動伝染の性差を検討したところ、怒り伝染($t(191.59)=-3.81, p<.01$), 悲しみ伝染($t(200)=-4.40, p<.01$)において有意差が認められ、どちらも男性(怒り伝染平均=7.45, 悲しみ伝染平均=7.88)に比べ女性(怒り伝染平均=8.56, 悲しみ伝染平均=9.09)の得点が高かった。

過剰適応が情動伝染に及ぼす影響について検討するため、過剰適応を独立変数、情動伝染尺度(愛情, 怒り, 喜び, 悲しみ伝染)を従属変数とする重回帰分析を行った(図1, 図2)。男性では、対自から怒り伝染への有意な正の影響を示した。自己抑制からは、愛情伝染, 悲しみ伝染への有意な負の影響を示した。よく思われたい欲求からは、怒り伝染, 悲しみ伝染への有意な正の影響を示した。女性では、自己抑制から愛情伝染に有意な負の影響を示した。よく思われたい欲求からは愛情伝染, 怒り伝染, 悲しみ伝染に有意な正の影響を示した。

JIFPの快不快・覚醒度評定の性差を検討したところ、快不

快評定で女性(平均=15.20)に比べ男性(平均=16.06)の得点が高かった($t(191.36)=-3.01, p<.01$)。図版12に対する覚醒度評定では男性(平均=3.38)に比べ女性(平均=3.94)の得点が高く($t(200)=-3.35, p<.01$)、図版29に対する覚醒度評定では男性(平均=3.18)に比べ女性(平均=2.69)の得点が低かった($t(200)=3.47, p<.01$)。

過剰適応高群・低群のJIFPの情動読み取りの差については、男性では有意差は認められなかったが、女性では覚醒度評定において、過剰適応低群(桑山平均=20.94, 益子平均=21.08)に比べ過剰適応高群(桑山平均=19.80, 益子平均=19.64)の得点が低かった($t(100)=-2.45, p<.05, t(100)=-3.15, p<.01$)。

考察

本研究の結果、男性の特徴として、怒りや悲しみといったネガティブな感情に敏感でなく、実際に他者の情動を読み取る際にもポジティブに読み取る傾向があるが、表情の明確さの変化には敏感に反応しない傾向があることが示された。過剰適応の状態になると、そのような男性の特徴がみられなくなり、他者によく思われたいという気持ちが強まったときに、他者の怒りや悲しみといったネガティブな感情に敏感になるという傾向が明らかになった。

一方女性は、過剰適応の傾向が男性に比べより強くみられることが明らかになった。また、怒りや悲しみといったネガティブな感情に敏感であり、実際に他者の表情を読み取る際にも、ネガティブに読み取りやすいことが示された。さらに、表情の微妙な差に敏感で、表情の明確さをよく読み取る傾向があることが明らかになった。過剰適応の状態になると、怒りに対する感受性を高め、実際に他者の情動を読み取る際には、他者の強い情動を弱く読み取る傾向がみられることが明らかになった。このように、過剰適応は他者の感情表出に対する感受性に影響を与えていた。さらに、女性の過剰適応の高さは、実際の情動の読み取りにも影響することが示唆された。

引用文献

- 石津・安保(2008) 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響. 教育心理学研究, 56(1), 23-31.
- 桑山久仁子(2003) 外界への過剰適応に関する一考察: 欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして. 京都大学大学院教育学研究紀要, 49, 481-493.
- 益子洋人(2009) 高校生の過剰適応傾向と、抑うつ, 強迫, 対人恐怖心性, 不登校傾向との関連. 学校メンタルヘルス, 12(1), 69-76.